

坪内逍遙生誕 150 年記念事業

逍遙新集

# 坪内逍遙 書簡集

全六巻

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 逍遙協会【編】



明治・大正・昭和  
という時代の息づかい

近代日本文化、芸術のパイオニアとして文学、演劇、  
芸術全般に大きな業績を遺した坪内逍遙(1859-1935)。

その作品執筆の意図、創作の過程、  
シェイクスピア翻訳に向ける情熱、門下生との交流、  
講義の準備や家庭での様子などを伝える  
176人へ宛てた約2,500通の書簡(未公開・未翻刻書簡多数)を収録。

日本の近代文化・社会を検証する  
第一級の資料がついに刊行!

早稲田大学出版部

2013年3月刊行!



坪内逍遙生誕150年記念事業

逍遙新集

# 坪内逍遙書簡集

全六巻

- 【体裁】 A5判 総約3,100ページ 上製 函入り 全6巻(セット)・定価 本体120,000円+税
- 【特長】
1. 朝河貫一、小泉八雲・節夫妻、河竹繁俊、島村抱月、野間清治など  
各界で活躍した人々に宛てて坪内逍遙が書きつづった、  
貴重な書簡2,197通(未公開または未翻刻のもの多数)を収録(第一巻～第五巻)。
  2. 『芸術殿』(国劇向上会月刊機関誌。1931年5月から1936年3月に刊行)掲載の  
293通の書簡に、最新の人物解説を付して再録(第六巻)。
  3. 各巻巻頭にカラー口絵、本文中にも実際の書簡や、逍遙直筆の図画、筆跡等  
豊富な図版を掲載、逍遙の人柄や、当時の雰囲気伝えます。
  4. 「永久保存版」にふさわしい堅牢・美しい装丁。全6巻を一つの函にお入れしてお届けします。

【おすすめします】  
大学図書館・研究室／学校図書館／公共図書館／文学館・博物館／芸術関連団体／  
関係自治体施設・機関・企業などの貴重な所蔵図書として／日本近代文学、英文学、演劇、  
歌舞伎、美術、日本近代史など文化・思想全般にわたる研究者・愛好者必読の資料に

【発行】 早稲田大学出版部 169-0051 東京都新宿区西早稲田1-1-7 電話: 03-3203-1551 FAX: 03-3207-0406  
【発売】 紀伊國屋書店 153-8504 東京都目黒区下目黒3-7-10 電話: 03-6741-9879 FAX: 03-6420-1356 (営業企画部販売促進課)

【申込書】 逍遙新集 坪内逍遙書簡集 全六巻 セット申し込みます。 【取扱い書店】  
ISBN 978-4-657-13800-2

ご住所  
お名前 電話番号

『坪内逍遙書簡集』  
刊行に寄せて

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館  
館長 竹本幹夫

『逍遙書簡集』(全六巻)は、すでに往復書簡が単行本化されている會津八一博士宛の分を除き、知友の人々に発信した逍遙自筆の未紹介書状等五巻分に、国劇向上会刊行の雑誌『芸術殿』所収分一巻を加え、翻刻本文に簡明な解題を付したもので、収録総数は一七六名分延べ二四九〇通に及ぶ。多くは早稲田大学の図書館、演劇博物館もしくは逍遙協会所蔵分である。逍遙の書状は、簡潔に用件を記したもののものもあるが、多くは具体的に懇切をきわめ、その人柄を偲ばせる滋味あふれる内容である。文学と演劇を中心とする多分野にわたる、研究と創作の両面に及ぶ逍遙の見識と足跡を、これらの書状からもたどることが出来る。その膨大な総量は、まさに生きた近代史資料と呼ぶに実質を備えている。本書が多くの文学愛好者、研究者に裨益するところ大なることを確信するゆえである。ここに本書を刊行するにあたり、種々のご助力・ご厚意を賜った関係各位、各機関に、心より御礼申し上げる。

『シェイクスピア全集』と並ぶ宝の山



明治・大正・昭和を通じて、文学・演劇・舞踊の世界に新しい地平を広げ続けた坪内逍遙の心の中に、どんな思いが息づいていたか。それを知るには、広範囲にわたる彼の友人・知人あての書簡にみながる言葉が最高の手がかりになるだろうし、それを知ることで、われわれは今日の文化・芸術の礎となった時代の光や空気を体感できるだろう。この全六巻約二五〇〇通の『書簡集』は、彼が訳した『シェイクスピア全集』と並ぶ宝の山である。  
東京大学名誉教授 小田島雄志

大きな足跡を照らす光源



早稲田大学演劇博物館が、所蔵する坪内逍遙書簡を刊行するという。河竹繁俊宛四五〇通余を筆頭とする多彩な人々への手紙である。演劇・文学関係ばかりでなく、多方面にわたって新しい情報が得られるにちがいない。その一端を垣間見たかぎりでは、たとえば養庭篁村には翻訳種として「トム・ジョーンズ」を紹介し、小泉八雲の質問には、日本の「ドラマ」と西洋との違いを細かく説く。水谷不倒には「早稲田文学」再興の時期尚早を報ずる一方、『読売新聞』の体質を鋭く批判している。いずれも誠実、かつユーモアを忘れず、逍遙の人となりや彷彿とさせる。本書全六巻が、その大きな足跡を照らす光源となることは言うまでもない。  
日本近代文学館副理事長 十川信介

坪内逍遙なくして近代演劇は語れない



早稲田に入學してすぐに、僕の足は演劇博物館へ向かっていった。歌舞伎にしてもシェイクスピアにしても、坪内逍遙なくして近代演劇は語れないことを、幼い頃から舞台に立っていた僕は、誰からともなく教えられていたからだ。そこには、明治という文化そのものが大きく舵をきった時代の人々が、近代日本における知性の規範とも言うべき人物に導かれ、新しい演劇を創っていった軌跡があった。そのプロセスを知る貴重な史料の公開は、研究者のみならず、僕ら演劇人にとっても興味深いことこの上もない。  
歌舞伎俳優 松本幸四郎